教材・支援機器活用実践事例（特別支援学校）

実践年度・タイトル		平成28年度 教科学習におけるノートテイク
授業について	教科名等 （ 該当する教科名等を選択。当てはまらない場合はその他を選択し 、次の単元・ 題材名の欄に記入。）	□国語　□社会　□算数/数学　□理科　□生活　□音楽　□図画工作/美術　□家庭/技術・家庭　□体育/保健体育 □道徳　□外国語/外国語活動　□総合的な学習の時間　□特別活動　■自立活動　□各教科等を合わせた指導 □その他の教科　□その他（　　）
	単元・題材名	教科学習におけるノートテイク
	授業の目標	ICTを活用し、ノートテイクを行うことにより、学習した内容を一人でまとめることができる
	観点別学習状況の評価の観点 （ 教科の特性により 設定した観点がある場合は「 その他」を選択し 記載。）	□「知識・理解」 ■「技能」 □「思考・判断・表現」 □「関心・意欲・態度」 □その他（　　）
学習集団と子どもの実態	学校・学部・学年・人数	■特別支援学校 □就学前　□小学生　□中学生　■高校生以降 □特定されない 第1学年　1人
	対象の障害	□視覚障害　□聴覚障害　□知的障害　■肢体不自由　□病弱・身体虚弱　□言語障害　□自閉症 □情緒障害　□LD（学習障害）　□ADHD（注意欠陥/多動性障害）　□その他
	子どもの課題 （特性・ニーズ）	□見る　□聞く　□話す　■読む　□書く　□計算する　□推論する　□運動と姿勢　□日常生活活動 □不注意　□多動性－衝動性　□社会性・コミュニケーション　□覚える・理解する　□その他 ＜特性＞ ○　肢体不自由　脳性麻痺（不随意運動型）、先天性甲状腺機能低下症 ・歩き方に少しぎこちなさがあるが、走ることはできる。 ・麻痺からくる緊張により、書くことに時間がかかる場面が見られる。 ＜ニーズ＞ ○　書くこと ・書字について、5つの漢字を書くのに60秒程度かかる。 ・授業中に板書が書き終えられず、寄宿舎での自習時間に続きを書くことがある。
ＩＣＴ活用について	使用した支援機器・教材の名称と画像 （ 使用した支援機器・ 教材の名称を記載し 画像を 挿入。なお、 特定の製品に特化した実践の場合は製品名を 記載。）	 1.アーム 2.外付けキーボード 3.OneNote 4.フリック道場 5.Vision Train1
	活用のねらい	Aコミュニケーション支援（□A1意思伝達支援　□A2遠隔コミュニケーション支援） B活動支援（□B1情報入手支援　□B2機器操作支援　□B3時間支援） C学習支援（■C1教科学習支援　□C2認知発達支援　□C3社会生活支援） ○　授業内容の理解の促進 （1）ノートテイクをiPadで行うことで、授業内容の理解を促進する。 ①フリック入力 ②キーボード入力（ローマ字入力） ③キーボード入力（かな文字入力） ④板書撮影 （2）撮影した板書をまとめる力を身に付ける。

<table>
<tr>
<td>授業における支援
授業展開</td>
<td>授業展開と画像
（授業の様子，ICT活用場面の画像を挿入。）</td>
<td>①フリック入力
はじめはゲーム感覚で楽しむことができ、もっとやりたいと興味・関心をもって取り組むことができた。平仮名の順番通りであれば入力速度も上がり、手書きに比べて約4倍の速度で入力することができた。しかし、文章を入力する場面では、どのように入力するか悩んでしまい、疲れる様子も見られたことから、本人との話し合いにより、方法を変更することとした。

②キーボードによるローマ字入力
情報の授業で学習したローマ字入力を活用して、外付けキーボードを利用した入力に取り組んだ。最初は意欲をもって家庭学習に取り組む様子が見られた。しかし、フリック入力と同様、ローマ字入力の組み合わせを考えて入力することに時間を要し、入力速度は向上しなかった。

③画面上のかな入力
フリック入力やローマ字入力と比較すると、かな入力による方法が一番正確であった。入力速度は速くならなかったが、本人にとってはやりやすさを実感できる方法であった。
OneNoteでかな入力を練習し、授業に臨んだが、焦りや指先の緊張から授業のスピードについていけず、自信をなくす場面も見られた。

④キーボードによるかな入力
ローマ字入力の速度が伸び悩んだことから、かな入力に変更し練習した。変更当初は入力速度が落ちたが、ローマ字の綴りを考える手順が省けるため、意欲的に取り組むことができた。入力速度の伸びを本人も感じることができ、継続することができた。
また、文章を見るときの眼球の動きなどに課題が見られたため、ビジョントレーニングを取り入れたことで、入力速度も速く安定するようになった。

⑤板書撮影
4つのパターンで入力方法を検討してきたが、現段階の入力速度では、板書をノートに書ききれないと判断し、授業の板書はカメラで撮影することとした。しかし、カメラで撮影する際、手が揺れてしまい、何度も撮影し直さなければならない様子が見られた。そこで、アームを取り付け、手振れを抑えて撮影することができた。また、撮り貯めた画像を見ながら、寄宿舎での自習時間に必要事項をまとめている。このことにより、授業に集中する時間が増え、本人の疲労感を減らすことができた。
また、文字入力の速度が1分間に10字を超えた頃から、本人が自信をもち、もっとたくさん打てるようになりたいと意欲を見せるようになった。将来的にパソコン検定の受検も視野に入れるなど、本人の意欲を継続できるよう今後も取り組んでいきたい。</td>
</tr>
<tr>
<td>効果・評価</td>
<td>子どもの様子や変容および授業の評価</td>
<td>現在は、必要に応じて板書を撮影し、授業後にまとめることにより学習を進めている。授業の展開に応じて、書く時間を保障したり、プリント学習を選択させたりするなどの配慮をしている。進学を見据えて、授業の形態に応じて、本人が書きやすい方法を選択できるよう指導を継続していく。</td>
</tr>
</table>